

修士論文概要**自閉スペクトラム症児に対する情動調整プログラムが
攻撃的な認知および行動に与える効果**

亀井 幸穂

1. 問題と目的

自閉スペクトラム症（以下、ASD）児・者は情動面の問題として、情動調整機能不全があることが報告されている（別府, 2018）。これらの問題は対人トラブルや不安・抑うつなどの問題を生じやすく、早期から情動理解や情動調整ができる思考や行動ができるように支援していく必要がある。

ASD をはじめとした発達障害のある児童・生徒を対象に、ソーシャルスキルトレーニングや認知行動療法に基づいた情動調整について、本邦でも多く研究され、報告がなされてきた。その有効性は確認されているが、介入期間が数か月に渡るプログラムや、1 回の介入が数時間かかるものが多い。長期間のプログラムは①参加児、スタッフ共に負担が大きくなる可能性がある、②開始までの待機時間が長くなる可能性がある、③出来事を忘れてしまう等、振り返りの困難やフィードバックの遅延が生じやすい、等が懸念される。

さらに、先行研究で共通して実施されている要素として、「感情理解」とコーピングやリラクセーションを含む「感情調整方略の実践」がある（山根・石本・松本・辻井, 2021；岬・丹治, 2021）。また、情動面に関する尺度による評価のみが多く、実際の行動データからの情動調整改善の実証に至っていないものが多い。そこで本研究では、小学校高学年の ASD 児に対して短縮版の情動調整プログラムの介入を行い、攻撃的な認知を変容させることで、情動と行動のコントロールを促進できるかを検討することを目的とする。

2. 方法 (1) 参加者：小学校高学年を中心に、ASD の傾向があり、感情面に問題を抱えている児童とその保護者へ筆者が実験への参加を

依頼し、参加の同意が得られた児童 2 名を対象とした（以下、A 児、B 児）。**(2) 手続き：**場所は C 小学校の相談室において実施し、期間は 2 か月程度であった。本プログラムは岬・丹治(2021)のプログラムを参考に、『感情理解』と『感情調整方略の実践』の講義・ワークを実践する計 5 回の個別支援を実施した。1 セッションは 45 分間とした。また、ワークで練習したことを日常生活でも実践することを参加児に促した。**(3) 従属変数と研究デザイン：**従属変数として、参加児に対し介入前後に 4 つの尺度を設定した。参加児に関する尺度は、情動制御力の評価として、精神的回復尺度、社会的自己制御尺度、児童用自己意識尺度を実施した。加えて行動制御力の評価として、担任の評価による CBCL 日本語版質問紙を実施した。CBCL は担任にのみ回答を求めた。研究デザインとして参加児が場面に合わせた適応的な感情調整、その行動ができているかを明らかにするために、Pre-Post デザインを用いた単一事例実験を用いた。また、社会的妥当性の評価として、全セッション終了後に参加児と参加児の担任に対し、事後アンケートの回答を求めた。**(4) 倫理的配慮：**参加児とその保護者に対し、研究目的や個人情報の保護等について説明し、同意書に署名を得た。

3. 結果

2 名とも、参加児本人および担任教師に実施した精神的回復尺度と社会的自己制御尺度において、介入前に比べて得点が向上した。また、担任教師に実施した CBCL における「引きこもり」得点、「社会性の問題」得点、「注意の問題」得点、「攻撃的行動」得点、「その他の問題」得点が介入前に比べて減少した。また、参加児および担任への事後アンケート

の結果から、本研究の手続きや成果について、社会的妥当性が高いことが示された。

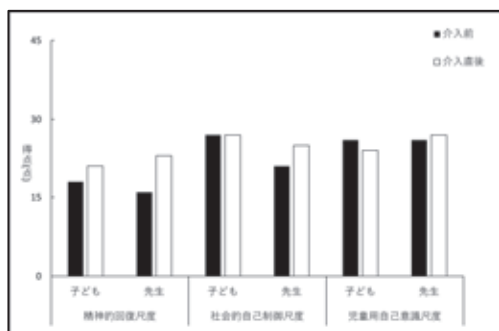


Fig. 1 A 児の情動調整の各尺度、自己意識尺度の得点の推移

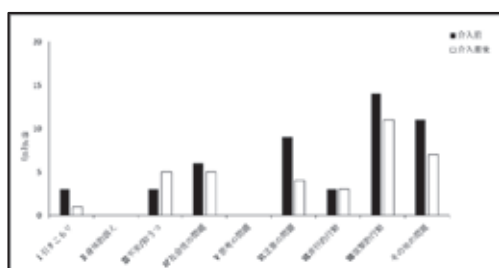


Fig. 2 A 児の CBCL 尺度得点の推移

Tab. 1 A 児の事後アンケート結果

項目	評価
1 作新の勉強は分かりやすかったか	4
2 作新の勉強は大変だったか	2
3 作新の勉強は楽しかったか	5
4 前よりイライラしなくなったか	5
5 薬の考えをするのは大変だったか	2
6 前よりもクラスの人とうまく関われるようになったか	3

Tab. 2 A 児担任教師の事後アンケート結果

項目	評価
1 以前よりも他児とのトラブルは減ったか	4
2 以前よりも先生とのトラブルは減ったか	3
3 今回の支援は対象児にとって負担であったと思うか	4
4 今回の支援は先生にとって受け入れやすいものだったか	5
5 機会があれば、他の児童にも今回の支援を受けさせたいと思うか	3

4. 考察

本研究の結果から、短縮版の情動調整プログラムによって情動と行動のコントロールが促進されることが示唆された。情動と行動のコントロールが促進された要因に関して次のことが考えられる。

参加児が現在の自分の感情を弁別するセルフモニタリングのスキルが向上したことが、

情動のコントロールを促進したと考えられる。また、実際に「イライラ」した場面に対して、どのような「薬の考え」をして情動調整をするかを一緒に考えることで、「イライラ」場面に対する認知が変化したと考えられる。

「毒の考え方」のワークにおいて、随伴性に注目することができたと考えられる。その後、「薬の考え方」をし、実践することで、自分が必要以上にイライラせずに済む思考や行動が強化されたことが、行動変容につながったと考えられる。さらに、情動調整方略の実践において他者との適切な関わりが増えたことで、相対的に他者との不適切な行動も減ったと考えられる。情動調整方略の実践によって適応的な自己ルールが生成され、それに基づいた行動をすることで、学校生活において強化されるようになったと考えられる。また、学校生活における不安・緊張が低下したことで、不注意傾向を改善したと考えられる。

今後の課題として、他の情動にも応用できるようにプログラム構成や内容の検討や参加児の変化をより詳しく評価することができる尺度や行動指標についての検討、プログラムの効果をより高めることができるよう、支援方法について検討する必要性が挙げられる。

5. 主要引用文献

- 別府哲 (2018) . 高機能自閉スペクトラム症幼児における情動調整の障害と発達. 心理科学, 39 (2) , 58-73
- 岬和希・丹治敬之 (2021) . 自閉症スペクトラム障害のある小学生が感情の調整方略を仲間とともに考える小集団指導. 特殊教育学研究, 59 (2) , 105-119.
- 山根隆宏・石本雄真・松本有貴・辻井正次 (2021) . 自閉症スペクトラム障害児の感情調整に関する介入プログラム (PEACE) の開発 支援合宿における予備的検討. 自閉症スペクトラム研究, 18 (2) , 85-93.